

平出和也・中島健郎 K2 西壁遠征最終の報告

現地同行スタッフ及び関係者の聞き取りが完了したことから、事故発生から救助活動終了までの経緯をあらためて整理し、ここに掲載いたします。

今回、平出・中島の両名による K2 西壁新ルートの挑戦に際し、撮影隊 2 名、現地エージェン트関係者 2 名、盟友のベテランハイポーター 1 名、パキスタン軍リエゾンオフィサー 1 名の計 6 名が参加。このほか、日本に設けた留守本部のスタッフが携わっています。

以下、経過報告となります。

2024 年 7 月 27 日

現地時間 5 時 19 分

C2(7500m)地点より、平出・中島からインリーチ(衛星携帯メッセンジャー)でメール連絡が入る。

『7月28日(7月27日) 昨晚予想外の降雪があり、出発を遅らせて様子を見ています。予定では登攀具だけ持って第二バンド偵察へ向かいます。』

現地時間 6 時 20 分

C2(7500m) 地点より、平出・中島からインリーチでメール連絡が入る。

『5時30分 C2 日帰りで上部偵察へ向かいます。』

補足

5700m のアドバンスドベースキャンプ(以下、ABC)にいる撮影スタッフによる情報。

ABC からは平出・中島の姿は直線で約 3 km 離れているため、肉眼で見るとはむずかしく、双眼鏡やカメラのレンズを通して、二人の姿を追跡・確認。

7月26日の日没から ABC では風が強く、それが 27 日の明け方まで続いていた。

平出・中島はコンテニューアス(ザイルを結んだまま行動すること)でラッセルしながら左にトラバースし、その後第二バンドの入口を目指して直上した。第二バンドの入口下にはブルーアイスがあるように見られた。

現地時間 7 時 00 分

約 7550m を登攀中に、氷と共に滑落した様子を撮影スタッフが目視にて確認。

現地時間 7 時 08 分

撮影スタッフより、日本の留守本部へ衛星携帯電話で連絡が入る。

『7時00分 2人 1000m 以上滑落。ABC より見えるが動かない。』

留守本部より石井スポーツへ事故の発生が報告される。

石井スポーツに遭難対策本部を設置。

ヘリコプターを要請。

K2 ノーマルルートのベースキャンプ(以下、BC)に滞在していた、別登山隊のベテラン隊長(8000m 14 座登頂者)がヘリコプターに乗り込み、平出・中島の状況を確認しに行くことになる。

現地時間 15 時 00 分

BC(5300m) 近くのもレーンに、パキスタン軍のヘリコプター 2 機飛来し、そのうちの 1 機に別登山隊隊長が搭乗。

※パキスタン軍では、安全上、必ず 2 機のヘリコプターが同時に飛来する決まりとなっている。

現地時間 15 時 49 分	別登山隊隊長が戻り、以下の報告と見解を示す。 二人はメインロープで繋がって、約 20700feet (約 6300m) にいる。 生死については確認できない。 ヘリのキャプテンにロングラインとランディングのリクエストを出したが、 キャプテンは「(標高と斜度の角度等により) できない」と言った。 そのため、マンパワーで救助するしかない。しかし、クレバスがたくさんあり、とても危険で救助は難しい。
2024 年 7 月 28 日 現地時間 8 時 20 分	ABC にいた撮影隊はマンパワーでの救助に備えて 5840m の高台に向い、 そこからドローンで平出・中島の状況と、ルートの詳細を確認。
2024 年 7 月 29 日 現地時間 5 時 20 分	撮影隊が ABC を出発。 レスキュー隊に使用してもらうために、ABC に救助に必要な装備を残す。
現地時間 10 時 30 分	撮影隊 BC 到着。
2024 年 7 月 30 日	ブロードピークのフィックスロープ設置チームである『カラコルム・エクスペ ディション』所属のハイポーターの 3 名が BC まで来て、レスキューの可能性 について撮影隊ならびに現地スタッフと話し合う。 その結果も含め、再度、救助活動について検討。 7 月 27 日の滑落時点から両名に動きが無いこと、現場にヘリが着陸できな いこと、さらに上部に大きなセラックがあり崩落の危険性も高く二重遭難も 発生する可能性があることから、地上からも近づけず救助活動が継続できな いと判断。
日本時間 14 時 00 分	家族・留守本部・石井スポーツの協議の結果、救助を断念する。

写真は 2024 年 6 月 28 日に、ABC から 150m 登った、5840m の高台から、中島が撮影したもの。
赤線は登攀予定ルートとして、中島が記入。
そのほかの情報は、撮影隊が記載した。

